

歴博映像フォーラム13

二五穴

ニゴアナ

— 水と米を巡る人びとの過去・現在・未来 —

2019 3/2 (SAT)

会場 国立歴史民俗博物館講堂
千葉県佐倉市城内町117番地

二五穴－水と米を巡る人びとの過去・現在・未来－

日 時 : 2019年3月2日(土) 13:00~16:30

会 場 : 国立歴史民俗博物館講堂

主 催 : 国立歴史民俗博物館

〈プログラム〉

- | | | |
|-------|---------------------------------|---------------------|
| 13:00 | 開会の挨拶 | 久留島 浩 (国立歴史民俗博物館館長) |
| 13:10 | 趣旨説明 | 西谷 大 (国立歴史民俗博物館副館長) |
| 13:20 | 研究映像『二五穴－この水はどこへ行くのか－』 | |
| 13:40 | 研究映像『二五穴－水と米を巡る人びとの過去・現在・未来－』 | |
| 14:20 | 休憩 | |
| 14:30 | 講演1「二五穴からみた身の丈にあった技術」 | |
| | | 西谷 大 |
| 15:05 | 講演2「民俗学と歴史学の邂逅－フィールドを介した学際的研究－」 | |
| | | 島立 理子 (千葉県立中央博物館) |
| 15:40 | 講演3「民俗誌映画と地域の記憶」 | |
| | | 内田 順子 (国立歴史民俗博物館) |
| 16:15 | 総合討論・質疑応答 | |
| 16:30 | 終了 | |

総合司会：内田 順子

講演者の紹介

にしたに まさる
西谷 大

国立歴史民俗博物館・副館長・教授

- ・『食べ物と自然の秘密 自然とともに』（小峰書店、2003年、第50回青少年読書感想文全国コンクール課題図書）
- ・『多民族の住む谷間の民族誌—生業と市からみた環境利用と市場メカニズムの生起』（角川学芸出版、2011年）
- ・編著『見るだけで楽しめる！ ニセモノ図鑑 贋造と模倣からみた文化史 視点でかわるオモシロさ！』（河出書房新書、2016年）
- ・『写真紀行 雲の上の千枚ダム 中国雲南・大棚田地帯』（社会評論社、2017年）

しまだて りこ
島立 理子

千葉県立中央博物館・主任上席研究員

- ・「共同研究『日本の中山間地域における人と自然の文化誌』中間報告 —記録からみる蔵玉・折木沢用水の開削」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第186集、2014年）
- ・「動植物の民俗語彙の翻訳を考える」（『博物館研究』・公益財団法人 日本博物館協会、2018年）
- ・「市の風景」（『韓日海洋民俗誌』韓国国立民俗博物館、2018年）

うちだ じゅんこ
内田 順子

国立歴史民俗博物館・研究部・民俗研究系・准教授

- ・「平成17年度 国立歴史民俗博物館 民俗研究映像『AINU Past and Present—マンローのフィルムから見えてくるもの—』：映画フィルムの資料批判的研究に関連する研究ノート」（『国立歴史民俗博物館研究報告』150、179-192頁、2009年）
- ・「映像の共有と諸権利—国立歴史民俗博物館における民俗研究を目的とした映像制作を事例として—」（『社会学評論』65（4）、504-520頁、2015年）
- ・『甦る民俗映像—渋谷敬三と宮本馨太郎が撮った1930年代の日本・アジア—』（岩波書店、共編著（宮本瑞夫・佐野賢治・北村皆雄・原田健一・岡田一男・内田順子・高城玲）、2016年）

歴博映像フォーラム13

「二五穴－水と米を巡る人びとの過去・現在・未来－」

開催にあたって

内田 順子・西谷 大・島立 理子

二五穴とは

「二五穴」は千葉県房総丘陵の小櫃川（おびつがわ）周辺に作られたトンネル状の用水路で、トンネルの大きさが「二尺五尺」（およそ60cm×150cm）であることから「二五穴」と呼ばれている。

江戸時代の終わり頃から作られ始め、現在も、平山用水、大戸用水、草川原用水、蔵玉・折木沢用水が水田の灌漑に利用されている。トンネルは、長いもので200～700mあり、全てのトンネルをつなぐと、全長10kmにもなる用水もある。

二五穴と「身の丈にあった技術」

歴博では、研究プロジェクト「日本の中山間地域における人と自然の文化誌」（H23-25年度）を立ち上げて、近世史（文献）・民俗学・生態人類学・生物学・地質学・考古学などの多様な研究分野による研究者で、二五穴について調査をおこなってきた。

人びとは、自分たちの知識と経験からさまざまな技術を創造しながら、自然のなかで生きてきた。地域の自然環境を利用して豊かに生きようとする人びとの営みが里山をつくるのだが、一言に里山といってもその形はさまざまである。

二五穴の維持には、おおがかりな機械や、電気も必要ない。地域社会の人びとの力だけで、自然利用の持続が可能である。二五穴という自然利用の方法は、いわば「身の丈にあった技術」であり、そこに歴史的な意義が見いだされると考えた。

二五穴と歴博映像

二五穴をめぐるさまざまな工夫は、時代の流れのなかで常に変化してきた。記録しなければ消滅していく。二五穴に関する研究成果は、これまでも展示・講演会・論文・エッセイなどで発信してきた。しかしそれだけでは、研究者・調査者の一方的な情報提供に偏ってしまう。地域の未来を担う人々に研究成果を活用してもらうには、どうしたらよいか。

そこで地域の歴史を残すために、地域の人びととの「協働」作業として映像を制作できないだろうかと考え、二五穴についての研究映像を制作することにした。本フォーラムでは、二五穴について異なる視点から制作した2種類の映像を上映し、映像が、地域の記憶と思いと期待を紡ぎ、地域力、地元力を育む力になりうるか、考えてみたい。

講演1 「二五穴からみた身の丈にあった技術」

西 谷 大
(国立歴史民俗博物館)

1. 里山における「身の丈にあった技術」

「身の丈にあった技術」とは地域社会の人びとの力だけで、持続可能な技のことである。里山とは、一般的には「人里近くにある、生活に結びついた山や森林に適度に人の手が入り、隣接する集落や農地を含めて生態系のつりあいがとれている地域」を指す。

しかしその形はさまざまであり、かつては地域社会における自然利用の数だけ、多様な形態の里山利用があったといっても過言ではない。

二五穴は、房総丘陵の小櫃川流域で「創造」された、「灌漑用水＝自然利用」の「身の丈にあった技術」の1つの典型例である。しかし、江戸時代の終わりから明治にかけて日本全国で、二五穴とは異なるが、地域の自然環境にあわせた、さまざまな灌漑用水が作られた。各地の灌漑用水路を紹介しつつ、中国雲南省の棚田と比較することで、自然環境利用に関する差異について述べてみたい。

2. 日本各地の灌漑用水路

坂本養川（長野県茅野市・八ヶ岳西麓）

海拔およそ1500メートルに取水口があり、海拔およそ1000メートルの田んぼに水を引いている。繰越堰という人工的な滝や樋で水をおくる。天明5年(1785)から開鑿がおこなわれ、寛政12年(1800)までの15年のあいだに多くの堰がひらかれた。

和田用水（宮崎県都城市・横市川流域）

シラス台地直下からの湧水を防ぐため、台地をとり囲むように堤防状の土塁を巡らし、その内側に水を流す。江戸末期に完成した。

片樋マンボ（三重県いなべ市）

江戸時代の終わりに新田開発が進むと用水不足になり、新たな水路の必要が迫ったことから時の庄屋、村民が協力して、横井戸を掘り、地下水を集めて用水とした。

新倉掘抜（山梨県南都留郡）

川口湖の水を新倉村（現富士吉田市）へ引くために嘯山の下を掘り抜いた全長3.8kmの灌漑用水路である。工事は元禄3年（1690）に始まり慶応2年（1866）にようやく完成した。

稲生川（青森県十和田市）

青森県十和田市周辺の稲生川は十和田湖を源とする奥入瀬川（おいらせがわ）から水をひき東西およそ40キロメートル、南北およそ32キロメートルにわたる三本木原台地に安政2年（1855）に工事を開始した。その後、何度も工事が行われ、人工河川の長さは、現在およそ70キロメートルにも達する。農業用水を供給しながら、太平洋まで達する人工河川である。

3. 中国雲南の棚田

中国の雲南省に、ベトナムと国境を接し九つの民族が暮らす者米谷という場所がある。ここにアール族という少数民族がいるのだが、彼らは壮大な棚田をごく短期間に作る技術をもっている。灌漑用水路は長いもので10キロメートル以上になり、水田は水路状で400メートルの長さをもつものもある。

者米谷は、およそ60年前まで、トラの住む大原生林だった。それをわずか10年ほどで水田に作り替え、自然林もほとんど残っていない。ここまで山全体を棚田にする理由は、斜面が急なため畦畔に占める面積が広くなり、反対にイネを植える水田面積が狭くなる。さらにコメの生産性が低いため、規模を拡大し作付け面積を増やす必要があった。

しかし棚田をここまで広げると、結果として従来の生態的な環境を徹底的に破壊し改変することにつながる。者米谷の例は、いわゆる伝統的で自然と共生していると思われがちな棚田を使ったコメ作りも、場合によっては生物多様性の維持や、生態的な環境の保全にとってはマイナスになりうることを示している。



雲南の棚田



大雨の後の崖崩れと棚田



講演2 「民俗学と歴史学の邂逅

ーフィールドを介した学際的研究ー

島立理子

(千葉県立中央博物館)

1. 国立歴史民俗博物館と千葉県立中央による共同研究

国立歴史民俗博物館と千葉県立中央博物館は平成23年（2011）に博物館活動にかかわる包括協定を結び、さまざまな連携をおこなってきている。その連携の1つが共同研究である。本日公開した二五穴にかかわる研究映像は、この両博物館が連携しておこなった研究成果の1つである。この共同研究には自然誌系の研究者も多く参加しているだけでなく、両館の研究者だけでなく、農学、人類生態学などの分野の研究者も参加しており、二五穴というフィールドを介し学際的な研究を行ったのがこの共同研究の特色といえる。

1つの研究分野の人間だけでは発見できないものも、さまざまな研究者の目を通してみることで発見できる。二五穴についての様々な分野からの研究成果を紹介する。

2. 房総丘陵の雨水の行方

米作に水は欠かすことができない。二五穴の分布する房総丘陵は長い間水不足に悩んできた。1つの理由として、房総丘陵は谷が深く、川と耕作地の標高差が大きく目を流れる川（小櫃川）の水を直接農業用水として利用することができなかつたということがある。

この地域の方々から田んぼの水についてお話をうかがうと「雨が強く降ると、山から鉄砲水のように田んぼに水が流れてくる一方で、雨が降らない時は安定して田んぼを水で潤すことは難しい」という。

東京大学農学部の千葉演習林が清澄山を中心とした房総丘陵にある。そこで長年にわたって、林に降った水がどのように流れていくのかを調査している。それによれば、降った雨の三割強はすぐに川に流れ込む。一方、約二割は地中深く浸透してしまう。これは、他の地域に比べて大変多い量だという。また、約四割は沢に流れ出てしまうのだが、これもまた雨が降っていないときにはすぐに涸れてしまう。

つまり、房総丘陵では降った雨はすぐに流れ出てしまうか、地中深く浸透してしまうため、沢から少しずつ流れ谷津田を潤すような水の量は少ない。更に、一旦雨が降れば大量の水が沢に流れ出る鉄砲水で、谷津田はあっという間につぶされてしまう。これは、房総丘陵の土質が影響していると考えられる。

谷が深く川から直接水を引くことができない、一方でひとたび雨が降ると水があふれ出れば、収穫直前の水田までもこわされてしまうというジレンマ。このような水環境のなかで、この悩みを解決したのが、二五穴である。

3. 二五穴以前の水田

我々は水田を増やすためにさまざまな工夫をしていきました。二五穴が引かれる前の水田と二五穴が引かれてからの水田について比較してみよう。

一般に天水田と呼ばれる水田がある。雨水を水源として灌漑設備を持たない田んぼである。もともと湿りがちな場所に作られる。山からの絞り水やわき水を水源とするもので、

房総では谷津田と呼ばれるものである。このような水田は日照りが続けばたちまち水不足となる。深い田んぼが多いため耕作しにくく、収量も悪い。

天水だけにたよらない方法による水田の1つに、沢水などをせき止めて堰（貯水池）を作り、そこから水を引くものである。しかし、この堰も日照りが続けば涸れてしまうし、たいした面積を潤すことができなかった。

房総半島の南部に「川廻し地形」という、房総丘陵に特徴的な地形がある。蛇行した河川をトンネルや切り通しで人工的に短絡させ、蛇行していた跡を水田にしたものである。旧流路をフルカワ、短絡された新しい水路をシンカワと呼び、フルカワとシンカワの間の島になった部分をナカジマと呼ぶ（図1）。江戸時代の終り頃から昭和にかけて川廻しの工事が行われた。

フルカワの部分が新田となるが、もともとフルカワの部分に流れ込んでいた沢水を水源として水田が作られ、大規模な灌漑設備を作る必要がない。元々の河床の部分が田んぼになるので、蛇行が大きければ、それなりに大規模な水田を得ることができる。しかし、水源は沢水である。日照りが続けば涸れてしまうであろうし、一旦雨が降れば沢からは鉄砲水が流れ、田んぼは川にもどってしまう。

谷津田や川廻しの水田では、水不足、鉄砲水という房総丘陵特有の水環境の影響を大きく受ける。

4. 二五穴以後の水田

二五穴による灌漑とはどのようなものなのか。簡単に言うと、二五穴ができたことで、図1のナカジマの部分が水田になった。ナカジマの部分は地形的には段丘である。この段丘の標高よりも高い場所に二五穴の取水口があれば、段丘面を水田にすることができるのである。ナカジマはもともと畑として利用されていた乾燥した場所だ。そこに必要な量だけの水が供給されるのだから、耕作もしやすい（深い田んぼなどない）。川の本流から水を引いているのだから、日照りが続いても水が涸れることはない。そしてなにより、鉄砲水に悩まされることはない。大雨が降りそうな時には、取水口をしめて二五穴に入る水を止めればよい。

二五穴は房総丘陵特有の水田の悩みを全て解消したのである。

5. 二五穴を掘る資金は誰がだしたのか？

房総丘陵にある二五穴の1つである、蔵玉・折木沢用水の開削にかかわる史料が蔵玉地区に残されている。嘉永5年（1852）から翌年にかけて開削された蔵玉・折木沢用水を例に、二五穴がどの

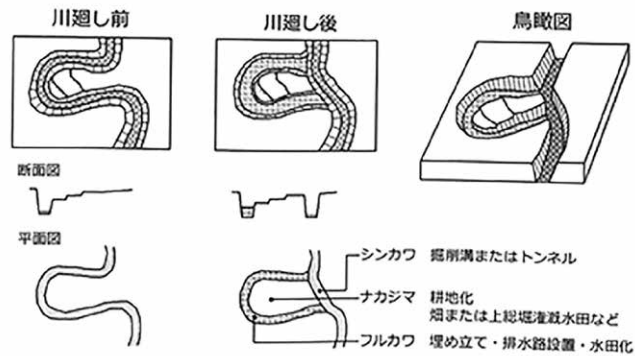


図1 (八木令子他「房総丘陵を水源とする河川流域の地域特性と地形誌」より)

ように開削されたかを見ていく。

「普通水利組合設置願 望陀郡亀山村蔵玉村外四部落普通水利組合」(年欠)によれば、開削は嘉永5年子12月に当時の領主であった川越藩主、松平大和守に出願し許可を得たとしている。発起人は用水の開削によって灌漑域となる蔵玉村、釜生村、折木沢村、坂畑村の村役人たち6名である。職工は地元黄和田畑村の粕谷卯之助と小苗村(現大多喜町)の又右衛門である。かかった費用は金五六八両余り、発起人が各自応分に分担貸与とある。

嘉永五年「乍恐以書付奉願上候(蔵玉用水願書)」「御普請御入用村々出金上納帳控」「御普請金通」とから費用の、「発起人が各自応分に分担貸与」についての事情が明らかになってくる。「乍恐以書付奉願上候(蔵玉用水願書)」は、嘉永五年十一月に川越藩の代官所である三本松役所に提出されたものである。これによれば、天保十五年(1844)に公費による用水の御普請を願い出たが聞き届けられなかった。このたびは「自力」をもつての普請が聞き届けられたとある。領主による「御普請」を断念して「自力」で普請することにした。

しかし、「御普請御入用村々出金上納帳控」「御普請金通」から「自普請」でなかったことがわかる。「御普請御入用村々出金上納帳控」は発起人たちが分担した出金の内訳を記した帳面であるが、そこには「御普請」「上納帳」とある。また、「御普請金通」は発起人たちが三本松役所に対して上納した普請金の通帳である。

つまり、発起人が普請金(工事費)を一度領主に上納することで「自普請」ではなく「御普請」という形で開削工事を行ってもらったのである。「自力」ではあっても、「御普請」である。「自普請」と「御普請」の違いは大きい。「御普請」の場合、修繕費は領主の負担となる。「普通水利組合設置願 望陀郡亀山村蔵玉村外四部落普通水利組合」にも、用水路修繕経費は明治八年(1895)までは領主が全額負担していたことが記されている。

6. 二五穴を掘る資金は誰がだしたのか？

「乍恐以書付奉願上候(蔵玉用水願書)」には、蔵玉・折木沢用水の一部分の掘削工事の見積書が添付されている。見積書は工事の請負人である職工地元黄和田畑村の粕谷卯之助と小苗村(現大多喜町)の又右衛門からのものである。

この見積書には、二五穴のトンネル部分の開削にかかる費用が、トンネル毎に記されている。これをもとに、蔵玉地区内の現在の二五穴の地図に、見積書に記されているそれぞれのトンネルの価格をまとめたのが図2である。当時の見積書と現在の二五穴が比定できるといのは驚きであった。

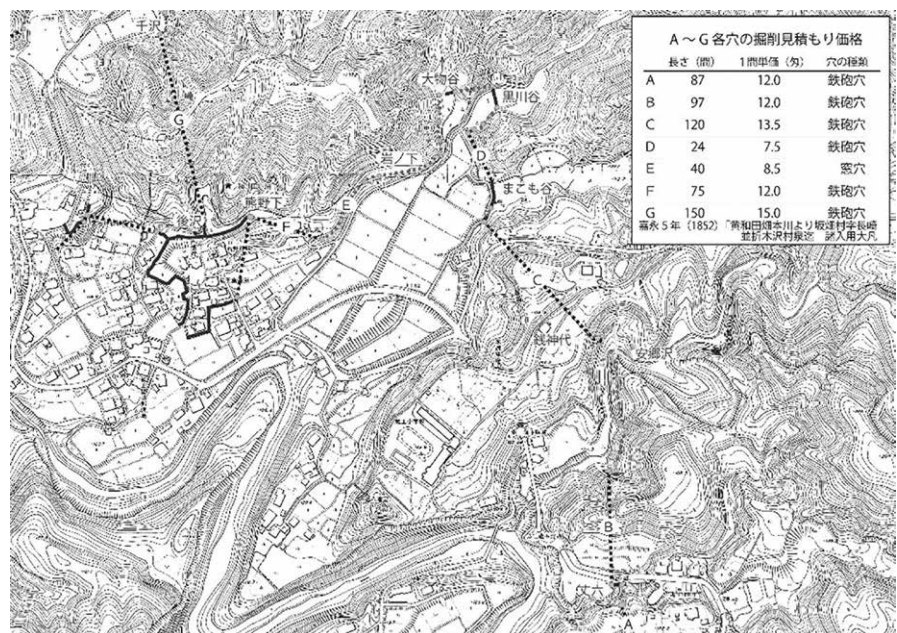


図2 蔵玉地区内の蔵玉・折木沢用水

さて、これを見ていくと、トンネルは長くなればなるほど1間あたりの単価が高くなっていること、山際にそって蛇行しながら走るトンネルと、直線に近いトンネルでは、直線に近いトンネルの方が1間あたりの単価が高いことがわかった。

山際に沿って走るトンネルでは、トンネルの途中に土砂を出すための穴（窓穴）を開けるので、労力が少なくなるためと考えられる。このような緻密な見積書を見ると、当時の測量技術がいかに高かったかがわかる。

工事を請け負った二人は作業員を雇って掘削工事をしていたようだ。彼らが提出した見積書には「小屋場においては、喧嘩はもちろん、いかがわしいことをする者がいた場合には人を替えます」と書かれている。よそから来た作業員が工事期間のみ小屋を建てて住み込み、トンネルの掘削作業をしていたようだ。

一方で、トンネル以外の開渠部の掘削については見積書に出てこない。「黄和田畑村本川より坂畑村字長崎並折木沢村泉迄 諸入用大積帳」は、蔵玉・折木沢用水の開削工事にあたって、何にいくらかかるかを計算した帳面である。開渠部は「人足仕立て」と記されており、工賃は計上されていない。こちらは、地元の人々が人足として掘ったのではないかと考えられる。つまり、トンネル部分は専門の作業員によって、開渠部は地元の人々が掘るという分業で用水路ができたのである。

【参考文献】

西谷大・島立理子・大久保悟「共同研究『日本の中山間地域における人と自然の文化誌』中間報告－二五穴からみた水利用」『国立歴史民俗博物館研究報告』第186集 2014年

上田大斗・大久保悟・島立理子・西谷大「共同研究『日本の中山間地域における人と自然の文化誌』中間報告－蔵玉・折木沢用水の立地と水田耕作の関係」『国立歴史民俗博物館研究報告』第186集 2014年

八木令子他「房総丘陵を水源とする河川流域の地域特性と地形誌」『千葉県立中央博物館自然誌研究報告 特別号』第10号 2018年

『房総の二五穴』千葉県立中央博物館 2014年

講演3 「民俗誌映画と地域の記憶」

内田 順子
(国立歴史民俗博物館)

はじめに

今回のフォーラムで上映する「二五穴」についての研究映像は、論文に代表されるような、研究者の一方的な情報提供ではなく、「地域の未来を担う人々に研究成果を活用して」もらい、「地域の歴史を残す」ことを目的として制作された。そのために、地域の人びととの「協働」作業として映像を制作することを目指したものだが、「協働」というのは、それほどたやすいことではない。映像を用いた研究では、現在、「協働」「共有」「感覚」などが、よりいっそう重要なキーワードとしてとらえられている。「二五穴」の映像制作でも、それらの言葉を意識していたが、それらが通奏低音の役割を十全に果たし、対話するように、生き生きとしたハーモニーやメロディが展開していく、そのような「協働」を実現することはできたのであろうか。本報告では、今回の「二五穴」の映像制作を振り返りながら、成果と課題を考えてみたい。



写真1 手持ちのカメラでの撮影（『二五穴ーこの水はどこへ行くのかー』より）

1. 「二五穴」の映像制作のプロセス

- ①近世史（文献）・民俗学・生態人類学・生物学・地質学・考古学などの多様な研究分野の研究者による二五穴について調査・研究
 - ・ 歴博共同研究「日本の中山間地域における人と自然の文化誌」（2011～2013年度）
 - ・ 歴博共同研究「歴史にみる人と自然の関係史」（2014～2016年度）
- ②日本列島の歴史・民俗を記録・分析・研究する手段として映像を位置づけ、映像を制作すること

を主な目的とする共同研究で、①の研究成果に基づいて、二五穴についての映像を制作
 ・ 歴博共同研究「歴史・民俗研究の資源としての映像の制作・保存・共有と歴博型プラットフォームの構築（2016～2018年度）」

表1 「二五穴」映像制作のプロセス概要

時期	内容
2016年9月	映像制作について地元のかたがたへ説明・協力依頼
2016年12月	聞き取り調査・撮影（草川原）
2017年1月	野焼き
2017年2月	用水管理組合総会
2017年3月	用水掃除
2017年4月	代掻き・田植
2017年5月	共同研究会 二五穴の映像制作計画の検討 ドローンによる空撮
2017年7月	関係者インタビュー、草川原地区の水分け
2017年8月	大規模灌漑事業の調査・撮影（宮崎県都城市） 君津市大原神社の祭礼 稲刈りのドローン撮影
2017年11月	絵馬の撮影
2018年3月	古文書の撮影
2018年4月	撮影素材・映像構成の検討、シナリオ作成
2018年5月～6月	粗編集（歴博）
2018年7月～9月	本編集（毎日映画社） 「博物館歴史学セミナー」（台湾 国立臺北藝術大學）で『二五穴－この水はどこへ行くのか－』上映
2018年10月	大規模灌漑事業の調査・撮影（青森県十和田市） 「第41回日本映像民俗学の会・二風谷大会」にて『二五穴－この水はどこへ行くのか』上映
2018年11月	大規模灌漑事業の調査・撮影（山梨県河口湖） ナレーション録音、音楽 『二五穴－この水はどこへ行くのか－』『二五穴－水と米を巡る人びとの過去・現在・未来－』日本語版の完成上映（松丘コミュニティーセンター）
2018年12月～1月	英語版のテキスト作成・英語ナレーション録音

映像制作の役割分担

西谷大（企画立案、スチール・動画撮影、構成・シナリオ作成、粗編集、編集）

島立理子（企画立案、スチール・動画撮影、構成・シナリオ作成）

内田順子（制作プロセス統括、動画撮影、粗編集、編集）

毎日映画社（撮影・録音・ポストプロダクション等の製作協力）

2. 「二五穴」：ふたつの映像のねらい

映像1 『二五穴ーこの水はどこへ行くのかー』

二五穴をめぐる人びとの、さまざまな記憶、思い、感情に重点をおき、「共感」を軸に映像を構成した。「二五穴」を初めて知る人に、興味・関心をもってもらえるような映像を目指した。

映像2 『二五穴ー水と米を巡る人びとの過去・現在・未来ー』

過去および現在の記録に重点をおき、下記の点を中心に、歴史資料やインタビューで説明しながら映像を構成した。

- ・二五穴をめぐる技術は、地域社会の人々の力だけで持続的な維持と利用が可能
- ・二五穴の歴史的な意義
- ・二五穴の歴史は時代の流れのなかで変化してきた



写真2 ウェアラブルカメラでの撮影（『二五穴ーこの水はどこへ行くのかー』より）



写真3 ドローンによる空撮（『二五穴ー水と米を巡る人びとの過去・現在・未来ー』より）

3. 「協働」の継続の重要性

地域の人びとと協働で

- ・ 歴史・民俗文化の調査を行う
- ・ 研究成果をかたちにする
- ・ 成果を活用して、新たな実践につなげる

これらの実践を、連環的・継続的に行うことで、実践に関わる人たちの間で、感覚、感情、考え方、感じ方、技術、経験・・・さまざまな「地域の記憶」が共有されていく。今回の「二五穴」の映像制作は、そうした連環形成のプロセスの中にあるもので、これで終わりではないはずだ。もしこの映像から新たな実践が生まれ、「地域の記憶」の共有につながらないなら、それは失敗と言えるのかもしれない。しかし、何かが連環するのは、今ではなく、もう少し先であるかもしれない。

映像は、制作者の意図を超えて、他者によって読みかえられていく。それだけ、映像には、雑多なものが織り込まれている。どんなに汲んでも、汲み尽せないものが映像にはある。それが映像の魅力であり、制作した映像を他者に解き放つときに感じる畏れの源でもあるだろう。

【参考文献】

村尾静二・箭内匡・久保正敏編、2014、『映像人類学ー人類学の新たな実践へ』せりか書房

箭内匡、2018、「過去・現在・未来」（前川啓治・箭内匡ほか『21世紀の文化人類学 世界の新しい捉え方』新曜社、319～347頁）

田沼幸子、2018、「映像と人類学」（桑山敬己・綾部真雄編著『詳論 文化人類学ー基本と最新のトピックを深く学ぶー』ミネルヴァ書房、313～329頁）

国立歴史民俗博物館の研究映像

歴博では1988年より、民俗研究の一環として「民俗研究映像」の制作をおこなってきました。

①現在の民俗の記録であること、②民俗誌的な映像記録であること、③研究資料としての映像記録であること、そして④研究成果の発表の手段としての映像による論文であること、という基本方針のもと、制作担当者である研究者自身が、企画から完成までの全てのプロセスに関わり、撮影や編集など、それぞれの研究対象に応じた工夫を凝らし、制作している学術映像です。現在、「歴博研究映像」として受け継がれています。

歴博研究映像一覧表

制作年度	題名	制作担当者	規格
昭和63年度	芋くらべ祭の村－近江中山民俗誌－	上野和男・岩本通弥・橋本裕之	カラー・日本語・100分
昭和64年度	鹿島様の村－秋田県湯沢市岩崎民俗誌－	岩井宏實	カラー・日本語・59分
平成2年度	椎葉民俗音楽誌・1990	小島美子	カラー・日本語・120分
平成3年度	都市に生きる人々－金沢七連区民俗誌（Ⅰ）－ 技術を語る－金沢七連区民俗誌（Ⅱ）－	小林忠雄・菅豊	カラー・日本語・70分 カラー・日本語・45分
平成4年度	黒島民俗誌－島譜のなかの神々－ 黒島民俗誌－牛と海の賦－	篠原徹・菅豊	カラー・日本語・60分 カラー・日本語・60分
平成5年度	景観の民俗誌 東のムラ・西のムラ	福田アジオ・篠原徹・菅豊	カラー・日本語・各58分
平成6年度	観光と民俗文化－遠野民俗誌94/95－ 民俗文化の自己表現－遠野民俗誌94/95－ 遠野の語りべたち	川森博司	カラー・日本語・45分 カラー・日本語・45分 カラー・日本語・29分
平成7年度	沖縄・糸満の門中行事－神年頭と門開き－	比嘉政夫	カラー・日本語・110分
平成8年度	芸北神楽民俗誌 第1部 伝承 芸北神楽民俗誌 第2部 創造 芸北神楽民俗誌 第3部 花	新谷尚紀	カラー・日本語・45分 カラー・日本語・48分 カラー・日本語・29分
平成9年度	風の盆ふいーりんぐ－越中八尾マチ場民俗誌－	小林忠雄	カラー・日本語・90分
平成10年度	大柳生民俗誌 第1部 宮座と長老 大柳生民俗誌 第2部 両墓制と盆行事 大柳生民俗誌 第3部 村境の勧請縄	新谷尚紀・関沢まゆみ	カラー・日本語・70分 カラー・日本語・36分 カラー・日本語・16分
平成11年度	沖縄の焼物－伝統の現在	松井健・篠原徹	カラー・日本語・90分
平成12年度	風流のまつり 長崎くんち	福原敏男・久留島浩・植木行宣	カラー・日本語・93分
平成13年度	金物の町・三条民俗誌	朝岡康二・内田順子	カラー・日本語・90分
平成14年度	物部の民俗といざなぎ流御祈禱	松尾恒一・常光徹	カラー・日本語・83分
平成15年度	出雲の神々とまつり 第一部 美保神社 出雲の神々とまつり 第二部 佐太神社 出雲の神々とまつり 第三部 荒神祭り	関沢まゆみ・新谷尚紀	カラー・日本語・52分 カラー・日本語・45分 カラー・日本語・15分

制作年度	題名	制作担当者	規格
平成16年度	現代の葬送儀礼 地域社会の変容と葬祭業 －長野県飯田下伊那地方 村落における公共施設での葬儀 －長野県下條村宮嶋家 都市近郊における斎場での葬儀 －長野県飯田市佐々木家 葬儀用品問屋と情報	山田慎也	カラー・日本語・45分 カラー・日本語・45分 カラー・日本語・45分 カラー・日本語・45分
平成17年度	AINU Past and Present マンローのフィルムから見えてくるもの	内田順子	カラー・日本語・102分
平成18年度	伝統鴨猟と人々の関わり－加賀市片野鴨池の坂 網猟－	安室知	カラー・日本語・37分
平成19年度	興福寺 春日大社 －神仏習合の祭儀と支え人々－ 薬師寺 花会式－行法と支える人々－	松尾恒一	カラー・日本語・71分 カラー・日本語・71分
平成20年度	筆記の近代誌－万年筆をめぐる人びと－〔本編〕 筆記の近代誌－万年筆をめぐる人々－〔列伝篇〕	小池淳一	カラー・日本語・52分 カラー・日本語・99分
平成21年度	平成の酒造り〔製造編〕 平成の酒造り〔継承・革新編〕	青木隆浩	カラー・日本語・88分 カラー・日本語・88分
平成22年度	アイヌ文化の伝承－平取2010 アイヌ文化の伝承－白老2010	内田順子	カラー・日本語・40分 カラー・日本語・40分
平成23年度	比婆荒神神楽－地域と信仰－	松尾恒一	カラー・日本語・69分
平成24年度	石を切る－花崗岩採掘の伝統と革新－〔本編〕 石を切る－花崗岩採掘の伝統と革新－〔技術編〕 石を切る－花崗岩採掘の伝統と革新－ 〔インタビュー編〕	松田睦彦	カラー・日本語・69分 カラー・日本語・51分 カラー・日本語・59分
平成25年度	盆行事とその地域差－盆棚に注目して－ 土葬から火葬へ－両墓制の終焉－ 甕島の盆行事	関沢まゆみ	カラー・日本語・50分 カラー・日本語・28分 カラー・日本語・20分
平成26年度	屋久島の森に眠る人々の記憶	柴崎茂光	カラー・日本語・80分
平成27年度	明日に向かって曳け－石川県輪島市皆月山王祭 2015－	川村清志	カラー・日本語・102分
平成28年度	モノ語る人びと－津波被災地・気仙沼から	葉山茂	カラー・日本語・63分
平成29年度	二五穴－この水はどこへ行くのか－ 二五穴－水と米を巡る人びとの過去・現在・ 未来－	西谷大・島立理子・ 内田順子	カラー・日本語・20分 カラー・日本語・40分

ご 案 内

【展示のご案内】

○第1展示室特集展示「正倉院文書複製の特別公開

－クラウドファンディングによる製作と展示－

会 期 2019年3月19日（火）～2019年5月12日（日）

○第4展示室特集展示「変わりゆく結婚式と近代化」

会 期 開催中～2019年5月12日（日）

※第1展示室「先史・古代」リニューアルオープン 2019年3月19日（火）

【催事のご案内】

第110回歴博フォーラム「新しい歴博の先史・古代総合展示について」

日 時 2019年6月15日（土）10：00～16：30

場 所 国立歴史民俗博物館講堂

申込方法 ①れきはくホームページ内専用フォームからお申込み。

<https://www.rekihaku.ac.jp/events/forum/index.html>

②往復はがきでのお申込み。

→行事名・開催日・住所・氏名（ふりがな）・電話番号を明記の上、
下記住所にお送り下さい。

宛先：〒285-8502 佐倉市城内町117

国立歴史民俗博物館 広報・普及係

そ の 他 聴講無料、定員260名。

お申込みは、2ヶ月前から前々日まで受け付ける予定ですが、定員に達した時点で締め切ります。

【歴博の情報発信】

国立歴史民俗博物館の企画展示・フォーラム・講演会等の情報は、ホームページ・ツイッター・ニュースレター（メルマガ）でもご案内しています。

○ホームページ <http://www.rekihaku.ac.jp/>

○ツイッター @rekihaku

○ニュースレター <http://www.rekihaku.ac.jp/others/mailmagazine.html>

※ホームページのトップ画面に「れきはくニュースレター」のアイコンがあり、そこから登録画面に進めます。

歴博映像フォーラム13

「二五穴一水と米を巡る人びとの過去・現在・未来」

発 行 日 2019年3月2日

編集・発行 国立歴史民俗博物館
〒285-8502 千葉県佐倉市城内町117番地
Tel. 043-486-0123(代)



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国立歴史民俗博物館
National Museum of Japanese History

ISBN 978-4-909293-09-1



9784909293091